

ゾンビワールド 前編

血に飢えたゾンビの群れに食り喰われる美女達



作者 大黒達也

ゾンビワールド 前編

作者 大黒達也

『はじめに』

西暦二千十*年、東西関係の悪化により、第三次世界大戦が勃発寸前となる。全面核戦争がひとたび開始されれば、人類はおろか地球全土に生息する全生命の絶滅が予測された。そのとき人類発生以来、歴史の奥底に潜んでいた闇の種族達が全人類に戦いを挑むべく蜂起した。各国の首脳や軍部指導者達が、彼らにより支配された。さらには、人類の数十%が、闇の種族が放ったウイルスによりゾンビ化し、軍隊を無力化させてしまった。

その結果、数週間のうちに全世界が、彼らの手中に落ちてしまった。全面核戦争は阻止され、全生命体の絶滅

は免れたが、人類は闇の種族達により支配されることになる。

二十代の若くて美しい女達は、闇の種族達の性交奴隷兼食料として施設に監禁された。それ以外の人間は、労力として酷使され、あるいはゾンビ達の食料として供せられた。刃向う者は容赦なく殺戮された。

科学者等一部の人間達は、闇の種族達に知識と技術を提供する条件で生存を保障され、仲間として迎え入れられた。

この物語は、人類世界が崩壊後、少数の人間達が自由と生存を求めて闇の種族達に戦いを挑むべく立ち上がり、死闘を続ける過程を描いている。

『登場人物』

黒木 くろき
雄介 ゆうすけ

筋力、生命力を人間の限界まで高めた人間兵器を研究する目的で、防衛省の研究機関にて秘密裏に造られた改造人間。年齢三十五歳。身長百八十五センチ体重八十五キロ。全身を鍛え抜かれた覆いのような筋肉で包まれている。

筋力は通常人の二十倍。細胞の再生能力も高く、刃物や銃器による傷で死ぬことは無い。

元は、陸上自衛隊の特殊部隊に所属しており、様々な携帯兵器の扱いに習熟している。

工藤 美奈
くどう みな

防衛省の研究機関に所属する研究員。年齢二十四歳。

高級モデルも及ばぬスレンダーで美しい容姿の持ち主。

黒木の筋力や再生能力についてデータ分析を行う。

『目次』

第一章 美女と野獣

第二章 最強の男

第三章 地上へ

『本編』

第一章 美女と野獣

朦々とする湯煙の中で、ひとりの美女が妄想にふけっていた。場所は広さ三十畳ほどで、近代的なデザインの浴室であつた。彼女は湯船に首まで浸かり、目を閉じて寛いでいた。今日一日のできごとを思い出していた。彼女は、防衛省の研究機関に所属する研究員であり、人体の筋力や再生能力を極限まで高める研究プロジェクトに所属していた。研究は最終段階まで来ていた。

黒木雄介。彼女は男の事を脳裏に思い描いていた。全身を鍛え抜かれた鋼鉄のような筋肉に覆われ、背が高くそして驚く程に粗野であつた。男は、美奈の研究対象であつた。

美奈は黒木の黒々として逞しい肉体を思い出していた。
自然に右手が乳房を触っていた。

「私、何しているんだろう」

美奈は透明無色の湯をたたえる湯船の中で、独り言を
呟いた。首を軽く振って立ち上がった。シミひとつ無く、
真っ白な裸身が湯煙の中に浮かび上がった。

美奈は、浴室を出てバスローブを羽織、隣接する広さ
二十畳ほどのダイニングルームに入った。冷蔵庫から缶
ビールを取り出し、タオルで洗い髪を拭きながら、ダイ
ニングテーブルに着いた。部屋には窓があるが、カーテ
ンが掛けられていた。カーテンが開けられることは無か
った。そこは地下三十メートルに造られた研究所の居住

区画であつたからだ。

美奈は缶ビールを飲みながら、壁掛け液晶ディスプレイのスイッチを押した。画面に表示されたのは、何かのクイズ番組であつた。整った顔立ちの男女が司会を勤めていた。

「さあ。今晩は最高の景品をご用意していますよ」

司会の男が満面の笑みを浮かべながら、話していた。

男の犬歯は異様な程に大きかった。美奈は男の笑みを見て身震いをした。画面には豪華景品というパネルが表示され、続いて檻に入れられた二十歳くらいの美しい女達を映し出した。三人の女達は、皆全裸で若く瑞々しい肢体を持っていた。皆、蒼白な顔をして、狭い折の中で一塊になり、ブルブルと震え慄いていた。

美奈は冷蔵庫に摘みを取りに席を立った。

番組では、檻に入れられていたひとりが、スタッフと

思われる若い女により、檻の中から引き出され、回答者

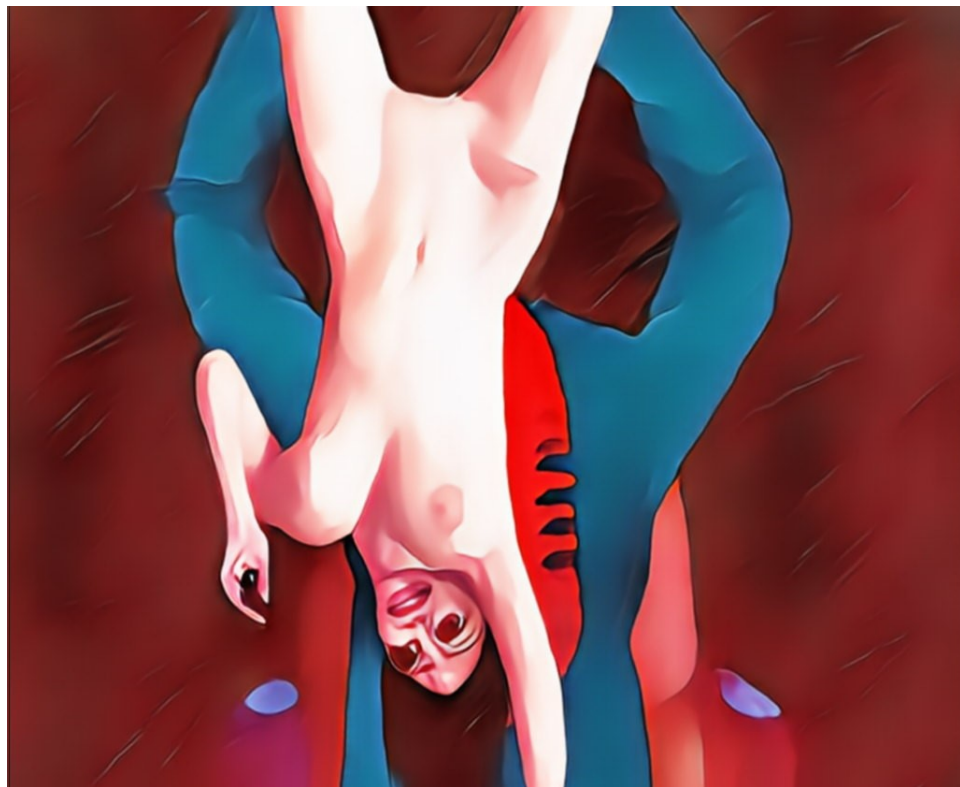


と思しき凶悪な顔付きの男に引き渡された。

女の泣き叫ぶ声が聞こえていた。男の身体は驚く程に大きかった。椅子に座っているが、座高だけでも引き渡された女と同じくらいの丈があった。立ち上がれば三メートルは軽く越すに違いなかった。巨人が椅子に掛けたまま、泣き喚く若い女の両足を持ち、逆さに持ち上げた。男の口元からは、大量の唾液が零れ落ちていた。男の形相が変わり始めた。口元から長大な犬歯が突き出し、両目が爛々と輝き出した。

女の尻に顔を押し付け、ガツガツとした感じでアヌスを舐り始めた。

男が、乱喰歯が林立する巨大な口を開けた。泣き叫ぶ女の盛り上がった白い尻に齧り付いた。一噛みで片尻を



噛み裂き、大量の尻肉を頬張った。女は白目を剥いて、全身を振寄せた。

席に戻った美奈は、液晶ディスプレイから視線を逸らせ、リモコンでチャンネルを変えた。

次の番組は料理番組であった。調理台の上に二十歳くらいの美しい女が、ひとりうつ伏せに横たえられている光景を映し出した。女は両手両足を調理台にロープで固定され、まったく身動きが取れないようであった。美しい顔は虚ろであり、むき卵のようなすべすべの白い尻が震え慄いていた、

画面が変わり司会者と思われる中年男の顔が映し出された。その男も犬歯が異常なほど発達していた。

「これから人肉料理の作り方をご紹介します。今日の食材は、最上級の肉質を持った二十歳の元女子大生です。

名前は的場ゆかりです。どうですか、素晴らしい容姿の持ち主でしょう。絹のような滑らかな素肌の持ち主であり、肉質は政府の保証付きです。それではシェフ。始めて下さい」

続いて調理服を着た中年男が映し出された。男は肥満した身体を揺らしながら、調理台に横たわるゆかりの白い尻を驚掴みにした。肉質を確かめているのか、ゆかりの尻を食い入るよう見詰めながら、尻肉を揉んだ。

「腸内洗浄は完璧ですか？」

先ほどの司会者が調理服を着た男に声をかけた。男はゆかりの尻を両手で抑え、尻の深い割れ目に顔を入れて、盛んに匂いを嗅いだ。顔を上げ、人指し指をアヌスの奥底まで進入させ、直腸内で動かした。ゆかりのさめざめ

とした嗚咽が聞こえていた。男はゆかりのアヌスから指を抜き、匂いを嗅いで、司会者の男にOKサインを送った。カメラは、満足そうに頷く司会者の顔を映し出し、そして、すぐに会場にいる客達の顔を映し出した。

調理服を着た男がゆかりを仰向けにして、肉切り包丁を下腹部に突き刺した。

「ギャー！」

ゆかりの口から絶叫が迸った。肉切り包丁を上下に動かして乳房の下まで切断していく。切断面から血塗れの内臓が露出した。血の滴る肝臓を抜き取り、ステーキ大に成型し、油を敷いたフライパンで炒めていく。

会場内には肉を焼く香ばしい匂いが広がっていく。

数分後、食卓テーブルの上には腹部を切り裂かれ、肝



臓を抜き取られたゆかりの死体と、皿に盛り付けられた
肝臓ステーキが置かれた。

数十人と思われる客達の顔は、皆、死人のように青白い顔をしていた。耳や鼻がもげて無い者もいた。皆、口元から大量の唾液を垂らしていた。

美奈は、深い溜息をついて、リモコンで液晶ディスプレイの電源を落とした。テーブルの上に顔を伏せて、声を出して泣き始めた。

時刻は夕暮れ迫る午後五時。東京港区にある六本木通りを一台の大型装甲車が、麻布方面に向かい時速八〇キロの速度で爆走していた。大型装甲車のサイズは、路線バスほどもあった。通りを走っているのは、その大型装甲車のみだった。路上には、ボロボロの衣服を着た無数

の歩行者が歩いていった。彼らは皆、一様に無表情であり、青白い顔をして死んだ魚のような視線を虚空に漂わせていた。装甲車は彼らを踏み潰し、跳ね飛ばしながら、進んでいく。不思議なことに彼らは少しも動揺することは無かった。

大型装甲車を運転しているのは、二十代くらいに見える痩せ型の男であり、無表情で青白い顔付きをしていた。頭部はきれいに剃り上げられ、側頭部には金属製の端子が皮膚に突き刺さっていた。

運転席後部の車内には、二十代前半くらいで、若くて美しい女が、二人両手を縛られ、そのロープで天井から吊り下げられていた。二人とも全裸であり瑞々しくすべての皮膚の持ち主だ。身長も百七十センチ近くあり、

長い手足、形の良い乳房、そして極上の美尻を持っていた。二人とも目を真っ赤にして泣き腫らしていた。今も咽び泣いていた。

最後部には、軍服を着た二人の巨人が、向かい合わせに座っていた。ふとりとも驚くほど背が高く、立ち上がれば三メートル以上の背丈がある筈だ。窮屈そうに身を屈めていた。二人とも白人であり、犬歯が異常に発達している以外は普通の容貌をしていた。

「マカロフ大佐。質問していいですか？」

軍曹の階級証を胸につけ黒髪の方が、もうひとりの男に声をかけた。

「何だ？クルツ軍曹。言ってみろ」

マカロフ大佐と呼ばれた鷲鼻で金髪の男が、地鳴りの

ような低い声で横柄に答えた。

「肉の輸送先は、一箇所で一体と聞いておりましたが、
二体いるのは何故でしょうか？」

クルツ軍曹と呼ばれた黒髪の男が、目の前に吊り下げ
られた女達に、欲情に濡れた視線を送りながら聞いた。

「いかにも一体の食用女を一箇所に輸送するのが今回の
任務だ。もう一体は予備だ。ここはゾンビどもが無数に
徘徊する危険地帯だ。何が起きるかわからない」

「何も起きなければ、連れて帰るのですか？」

「何も起きなければな」

マカロフ大佐が、意味深な笑みを浮かべた。

「この女は、エリザベート公爵から茂木博士への贈り物
でしたね？」

「そうだ。偉大なる公爵からの御命令により、食用女を届けねばならない。今夜の晩餐会で使おうらしい」

「さぞかし美味でしょうね」

クルツ軍曹の口元から唾液が滴り落ちていた。食い入るように女の美尻を見詰めていた。

「当たり前だ。この人間の女は、大戦前にこの地で最高級モデルをしていたのだ。大戦後、飼育施設に入れられ十分な食肉調整を受けている。見た目も最高だが、肉質も最上級だ。食用女の肉は脂が載っていて舌の上で蕩けるというぞ」

「食べてみたいですね」

クルツ軍曹が、口元に浮んだ唾液を手の甲で拭いた。

「俺もだ。運転手！ゾンビどもが見えなくなったら車を

止めろ」

マカロフ大佐が叫ぶように言った。

「了解しました」

運転席からロボットのような機械的な返事が返ってきた。

た。大型装甲車はその後数分間走り続けて停車した。

「クルツ軍曹。周囲にゾンビがいないか確認しろ」

「了解しました」

クルツ軍曹が、天井の扉を押し上げ、そこから首を出して、周囲の状況を確認した。路上にゾンビの姿は見えなかった。

「大佐。周囲にゾンビの姿は、見当たりません」

「そうか。では少し休憩としよう。クルツ床に毛布を敷け」

マカロフが、腰を折り曲げながら女達のひとりに近付き、手首の縛めを解いた。美しい二重瞼に鼻筋の通った容貌を持った女は両目を見開き、大声で泣き始めた。マカロフは、泣き叫ぶ女の手を引いて、引き摺るように車両後部に連れて行き、毛布が敷かれた床に横たえられた。「こいつは予備だ。問題が起こりそうも無いので、夕食とすることに決めた。クルツ。異存はないな？」

マカロフは、泣き叫び命乞いをする女の乳房を驚掴みにした。女の叫び声がいつそう激しくなった。

「異存なんて。ある訳がございません。私もご相伴させていただきますのでしょいか？」

「このことを誰にも言わないと誓えるか？」

「はい。最初から食用女は一体のみでした」

クルツは床に両手をつけて、女の股間を覗き込んでいた。

「よかろう。食う前に、少し楽しもう。女。啗えろ」

マカロフはズボンを脱いで、巨大な男根を剥き出しにさせた。先端から透明な液が滴り落ちていた。女の黒髪を掴み、男根を顔に押し付けた。女は助かりたい一心か、マカロフの前に膝間ついて、長さ三〇センチ、直径五センチ近くはあり、凄まじい異臭がする男根を啗えようとした。しかし、大きすぎて口に入らなかった。上目使いにマカロフの顔を見ながら、可愛い舌で、亀頭を舐め回した。白魚のような指先で、マカロフの巨大な睾丸を愛撫した。マカロフは余程気持ちがいいのか、目を閉じて女に身を任せていた。

一方、クルツは女の背後に座り、目の前で揺れ動く美尻を血走った目で見詰めていた。

暫くして、マカロフが野獣のような声を上げ、女の口内に精液を迸られた。

「飲め！」

余韻に浸りながら、マカロフが女に命じた。女は呆然とした表情で、白濁した大量の精液を必死の思いで飲み干した。

「クルツ。女のマ*コを舐めてやれ。俺は少し休憩する」
マカロフが女から離れ、床に座った。

「了解しました」

クルツが満面の笑みを浮かべながら、女を床に押し倒し、両太腿を持ち上げ、股間に口を付けた。淫らな音を

立てながら、臍を舐り始めた。女は呆然とした表情で天井を見詰めていた。暫く愛撫が続けられた。快感のためか、女が喘ぎ声を上げ始めた。極上の白い裸身が淫らに動き始めた。クルツは女をうつ伏せにして、今度は深い尻の割れ目に顔を入れ、アヌスを舐り始めた。

女は余程気持ちがいいのか、毛布の縁を掴みながら、鋭い喘ぎ声を上げた。クルツは女のアヌスを舐りながらクリトリスを巨大な指で愛撫した。女の喘ぎ声が一段と高くなった。女は、クルツにアヌスを舐られながら、四肢を突っ張り、絶頂を迎えた。

「交代だ」

マカロフがクルツの肩を掴み、声をかけた。

「了解しました」

クルツが上擦った声で答え、女から離れた。

マカロフは、床で余韻に浸っていた女を前向きに抱き上げ、床に座った。射精のために萎えていた男根が、今は屹立していた。男根の先を女の膣口にあてがい、一気に突き込んだ。

女の膣が裂けて、大量に出血した。女は両目を見開き、声を限りに絶叫した。マカロフは女の腰を両手で掴み、上下に動かした。女は白目を剥いて失神した。

「クルツ。お前も楽しめ」

マカロフは女と結合したまま、仰向けに横たわった。クルツが目を血走らせながら、失神した女の背後から、アヌスに男根の先をあてがい、ゆっくりと押し込んだ。女の直腸が裂け、出血した。女はあまりの苦痛に目を覚

まし、大声で泣き喚いた。クルツの長さ三〇センチあまりの男根が、ミシミシという音を立てながら、女のアヌにめり込んでいく。女は二人の巨人に前後から貫かれ、再び失神した。女は百七十センチくらいの身長があるのだが、巨人達に比べればまるで子供の背丈でしかなかった。巨人達は自分の半分しか背丈が無い、女を前後から挟み込むようにして、巨大な男根で犯し始めた。

男根が抜き差しされる度に、膣やアヌから鮮血が飛び散った。数分後、二人は獣のような絶叫を上げながら、女の体内に精液を吐き出した。女は出血多量により、既にショック死していた。

巨人達の欲情に濡れた瞳が爛々と輝き出した。それは悪夢に出てくる悪鬼の顔であった。口元が大きく裂け、

巨大な犬歯を剥き出しにした二人の巨人達は、女の両足を一本ずつ掴んで、一気に引いた。極上の裸身が、半分に裂けて内臓が床に飛び散った。巨人達は縦に引裂かれた女の死体の近くに座った。

マカロフが女のすべすべでムチムチの太腿に齧り付き、クルツが美尻に牙を立てた。車内には、女の骨を噛み砕き、柔肉を噛み裂き貪り喰う音が響いていた。

午後十九時を過ぎた頃、悪鬼達とひとりの美女を乗せた大型装甲車が、麻布にある閑静な高級住宅街を爆走していた。街路灯が消えた暗い通りには無数の血に飢えたゾンビ達が獲物を狙い、彷徨っていた。

大型装甲車は、都心でありながら、公園のように広大

な敷地面積を持つ、大邸宅の前に停車した。頑丈な造りをした鋼鉄の門扉が、ガラガラと音を立てて開けられ、大型装甲車が進入していった。

「遅いではありませんか。マカロフ大佐」

四十代半ばくらいに見え、メガネをかけた痩せ型の男が、自分より一メートル以上も上背のあるマカロフの前に立っていた。

「ゾンビどもが、大勢で邪魔してくれたのだ。人間であるお前が私に文句を言っているのかね？ 茂木博士」

マカロフは、茂木という名の男を見下ろした。片腕には、大型装甲車で運んできた全裸の美女を軽々と抱えていた。美女は肩先を震わせながら嗚咽を漏らしていた。

「め、滅相もございません。私はただ……」

茂木は、肩先を震わせながら俯いた。

「遅いではないか。マカロフ大佐」

そのとき、真紅のシャツの上に黒色のタキシードを着た二十代後半くらいに見える白人の男が、マカロフに横柄な感じで声をかけた。男はこの世の者とは思えぬほどに整った顔立ちをしていた。

「これは、ウィリアム伯爵ではございませんか」

マカロフは、自分より一メートル以上も身長が低く、ブルーの瞳を持ち、燃え上がるような金髪の白人に深々とお辞儀をした。

「どこで何をしていたのだ？ 晩餐会の席で、皆主食を待ちわびていたところだぞ」

「申し訳ございません。ゾンビどもの始末に梃子摺って
おりました」

「もう良いわ。早く、肉を渡せ」

ウィリアムは、異様に鋭い犬歯を剥き出しにして、マ
カロフの顔を見上げた。

「仰せのままに」

マカロフは再び深くお辞儀をして、ウィリアムに片手
に持っていた全裸の美女を引き渡した。ウィリアムも
軽々と女を抱き上げ、満面の笑みを浮かべた。

「なるほど、エリザベート公爵のお目にかなった女であ
るだけに極上の肢体を持つておるな。晩餐会にふさわし
い美肉である。ご苦勞であつた。もう、帰ってよいぞ」

ウィリアムと茂木は、マカロフに背を向け広大な中庭

に設けられた晩餐会の会場に戻って行った。マカロフは、少しの間二人に向けて深くお辞儀をしていた。ふたりの姿が見えなくなつてから、「血吸い野郎が」と小さな声で呟いた。一瞬両目が爛々と燃え上がった。すぐに踵を返し、帰途に着いた。

白亜の大邸宅に造られた広さ数百坪はある中庭に、数十卓の丸テーブルが並べられていた。各テーブルでは、正装姿の男女が赤ワインやシャンパンを飲みながら歓談していた。白人の姿が多かった。背丈が三メートル以上もある巨人も何人か混じっていた。

中央に設えられた調理台の上に、先ほどの全裸美女が、

仰向けに横たえられていた。女は、嗚咽を漏らしながら、震え慄いていた。自分の運命を知っているかのようにであった。

「ウィリアム伯爵。大分時間が押しております。お客様も空腹を感じているようですが、美味しく調理するには血抜きなどの処置が必要です」

震え慄く女の近くに立ち、調理服に身を包んだ東洋人の中年男が、ウィリアムに向かい恭しくお辞儀をした。

「そうだな。これもマカロフの馬鹿者のおかげだな。血抜きは私と茂木博士が担当しよう。十分かそこで十分だろう。いいな？ 陳料理長」

「閣下の仰せのままに」

陳と呼ばれた調理服の男が再び深いお辞儀をした。

「では、茂木博士。女の膣を潤してくれ」

「承知いたしました」

茂木はウィリアムとの付き合いは長く、気心が知れた仲であった。調理台の上に仰向けに横たえられた美女の両太腿を大きく押し開いた。剃髪された美しいサーモンピンク色の膣が剥き出しにされた。

「女。名前を言え」

茂木は女の膣を覗き込みながら、上擦った声で聞いた。

「ひ……瞳と申します。お願いでございます。どうか、お助けください」

「無理なことは言うな。お前は肉に過ぎないのだ。これから血抜きをされ、調理され客達に振舞われるのだ」

「いや！殺さないで」

「……」

茂木は欲情に濡れた目で、女の全身を食い入るように見詰めた。ミス日本に選ばれたほどの美女であった。シミひとつなく絹のように滑らかで、瑞々しい肢体を持つていた。

茂木は目の前の膺に口を付け、音を立てて舐り始めた。若くて美しい女の素晴らしい匂いで脳が張り裂けそうになっていた。女の豊かな尻を驚掴みにしながら、膺やクリトリスを舐め回した。瞳と名乗った女は、両手で美しい顔を覆い隠しながら、肩先を振るわせ咽び泣いた。

先ほどまでざわめいていた場内は、今では静寂が支配していた。調理台の上で股間を舐められる女の姿に、客達は皆魅せられ固唾を飲んで見守っていた。

「そろそろ、よいであろう。茂木博士。貴方は膣を犯しなさい。私は肛門をいただくことにする」

ウィリアムが茂木の肩を片手で軽く叩いた。

「はい。仰せのままに」

茂木は、瞳の愛液に濡れた顔を上げ、ズボンとパンツを脱いで調理台の上に横たわった。茂木の黒々とした男根が天を突きいていた。ウィリアムが、嗚咽を漏らす瞳を抱き上げ茂木の股間の上に座らせた。茂木の男根が瞳の膣に飲み込まれた。瞳が、大きな喘ぎ声をあげ、背筋を仰け反らせた。

ウィリアムもズボンを脱いだ。下着は穿いておらず、長大な男根が剥き出しとなった。瞳の背中を押して、前のめりにさせ、背中に覆い被さった。

声を限りに泣き喚く瞳の豊かな腰を押さえ付け、男根を肛門にのめり込ませた。

「ギャー！」

瞳の絶叫が会場内に響き渡った。ウィリアムは構わず、腰を前後左右に振った。茂木も下から、瞳の膣を突いた。

「おおお……最高に締め付けるぞ！」

ウィリアムが歓喜の声を上げた。他の客達は席を離れ

彼らを取り囲んでいた。皆、期待に目を輝かせ、口元から大量の唾液を滴らせていた。

瞳は前後から膣と肛門を犯され、目を白黒させていた。

肩まで伸ばしたセミロングの茶髪が乱れ、美しい顔を苦痛に歪めていた。茂木が下から瞳の乳房を鷲掴みにして揉んでいた。

瞳の肛門が裂け、激しく出血した。ウィリアムが腰を動かしながら、それを手で掬い目の前にかざした。鮮血が付いた手の平を酔ったような目付きで見詰めた。ブルの瞳が、血のように赤く染まり始めた。口元には鋭い犬歯が現れた。

背後から瞳の首筋に噛み付いた。

「嫌！」

瞳の柔らかな首筋が裂け、鮮血が迸り出た。ウィリアムは瞳を犯しながら、首筋から噴出す鮮血を口で受け、ゴロゴロと喉を鳴らしながら、飲み込んだ。

やがて瞳の動きが緩慢になり、最後にはピクリとも動かなくなった。

「茂木。中に出してはならぬぞ。肉が不味くなるからな。」

おい。下女を呼べ！」

ウィリアムと茂木は、まったく動かなくなった瞳の裸身から離れた。すぐに全裸の若い美女二人が、彼らの前に膝立ちとなり、屹立した男根を咥えた。二人の美女達が彼らのアヌスを指先で刺激した。

「おおお……」

彼らは雄叫びを上げながら、女達の口内に白濁した精液を迸らせた。

傍らで見ていた調理長の陳が、出血多量でショック死した瞳を調理台の上に横たえ、巨大な中華包丁で首と手足を切断した。元ミス日本の極上の胴体から中華包丁で皮を剥ぎ、柔肉を削り取っていく。形の良い乳房が切り取られ、腹部が縦に切り裂かれ、内臓が掴み出された。

多くの男女を魅了したであろう盛り上がった白い尻が、中華包丁で切り裂かれ、柔肉が切り取られていく。

陳の部下が、切断された両足の太腿肉を中華包丁で捌き始めた。切り取られた肉は刺身にされるか、近くに置かれた大型コンロの鉄網に載せられ、炭火で炙られた。

周りの客達が、大皿に盛られた腿肉や尻肉の刺身を競うようにして食べ始めた。炭火で焼き上げられた乳房や肝臓が見る間に、客達の口内に消えていった。

肉を殺ぎ落とされた骨は、水が満たされた大鍋に入れられ、スープの出汁にされた。切り落とされた頭部は、口を開けられ、舌を引き出され切断された。頭頂部から斧で叩き割られ、脳をシャモジで捌い取られた。

美女の肉体で捨てるどころなどは、何も無かった。す

べて、生であるいは調理され客達に振舞われた。美女の
柔肉を使った人肉宴会は夜が更けるまで延々と続けられ
た。肉が少なくなれば、下女として使われている人間の
若い女達が引き出され、生きたまま頭部を切り落とされ
た。その肉は生あるいは調理され、貪り食われた。

